

マンボウおもちゃ箱

北 杜 夫



新潮文庫

Asuku

マンボウおもちゃ箱^{ばこ}



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 131 P

昭和五十二年十一月二十日 印刷
昭和五十二年十一月三十日 発行

著 者 北^{きた} 杜^{もり} 夫^お

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社

© Morio Kita 1977 Printed in Japan

新 潮 文 庫

マンボウおもちゃ箱

北 杜 夫 著



新 潮 社 版

2432

目次

1 短い話、長い話

陸魚……………三

買物……………一五

2 女のいる風景

スリと亭主……………四〇

男の買物、女の買物……………四三

季節外れの話……………四六

自転車に乗る女……………五〇

新婚旅行……………五三

近ごろの姑……………五六

果汁の話……………五九

レディ・ファースト……………	三
ダメなパパ……………	五
母の味……………	九
軽井沢の夏……………	二
女の子の味……………	七

3 お金についての閑話

五円玉まかり通る……………	八
一銭と一円……………	五
株こわい……………	九
小銭への愛憎……………	六
ギャンブルのこと……………	一〇
金貨ジャラジャラ……………	一七

4 食後の閑話

タイム・マシン	二四
皮膚感覚	二七
幼少時の教師	二〇
「近接ヲ防止スルヲ要ス」	二四
蛾の美しさ	二七
ビショップ博物館	一三〇
子供の本のこと	一三三
公園	一三六
スポーツのこと	一四〇
温泉	一四七
自動販売機など	一五二
幻想の味	一五四
国語辞書の話	一五七

5 躁病、鬱病

梅崎氏のギックリ腰	一六三
長編を終えて	一六七
躁病その後	一七三
私は鬱病である	一七七
傲慢と韜晦	一八一
無為徒食	一九三

6 困った話

マンボウ親バカ記	二〇〇
素人の弁	二二七
初めての本	二三一
自分の本	二三四
出版記念会	二三七

ひと忘れ	二三〇
賀状	二三三
手紙のこと	二三五
電話のこと	二四〇
テレビのこと	二四三
薬の広告	二四七
夫と妻	二四九
雀	二五二
専門家	二五四

カ
ッ
ト
谷内六郎

マンボウおもちゃ箱

1
短い話、長い話



陸 魚

海辺は今日もおだやかだった。

藍色の目をした子供がいう。

「だけど、オバケなんて、ほんとうにいるものかなあ」

彼は疑わしそくに、新式の水中銃をひらひらとふった。夏休みのために、前日買ってもらったばかりなのだ。

「もしオバケが出てきたら、ぼく、これで射ってやる」

「そんなもの役に立たんさ」

と、大柄な子がいった。彼はトビ色の目をしていた。

「陸の、ずっと奥にいるんだもの」

「どんなオバケが？」

「一つ目なんてやつがいる。そいつは、目が一つしきやないんだ」

「ウソだい。一つ目なんて」

「だけど、もし一つ目が出てきたら？」

「そんなもん、いっこないよ」

「一つ目はあやしいとしても」と、大柄な、トビ色の目をした子供はいった。「陸魚はたしかに
いる」

「ウソだい。それも伝説だい！」

「だが、もし陸魚が本当に出てきたら？」

藍色の目の小柄な子は、おそろおそろ陸地を見やった。真赤な砂浜、そのむこうにつづく白い森。そこまでは彼らは行けない。あの奥ぶかい森のどこかに、陸魚が本当に隠れているのだろうか？

藍色の目の子は、びくつきながら考えてみた。陸魚はおどろくほど早く陸地をかけるそうだ。もしあの森から陸魚が出てきたら、ぼくは大急ぎで海に逃げる。だが、陸魚はいくらかは泳ぐというではないか、ぼくより早いかしら？ なによりも、絵本で見た陸魚の形態が、心底から彼をおびやかした。いくらオバケだとはいえ、それはあまりに恐ろしい姿だった。ふりあげた二本の手、そこに鉤かぎのようについた五本の指、すっと立った二本の足、なによりも、ランランと輝く二つの目。

「帰ろう。もう帰ろう」

と、幼い子は泣声をあげた。実際、彼の顔はくしゃくしゃに歪ゆがんでいた。

「大丈夫さ。陸魚なんていやしないんだよ」

大柄な子は言って、それでもやさしく藍色の目の子の肩を撫なでた。

それから二人の子供は、三本ずつの手足をひらひらと動かして、八つの目で水中を眺めながら、沖の方へ泳ぎはじめた。じきに彼らは水中にもぐった。彼らの家のある、アルファ・ケンタウリ星の茶色の海の底へ。

買物

物

私はひとつの遊びをした。その男を、精神病者ではないと決めてやったのである。

私はある公立の精神病院に勤める医者である。およそ四百五十人の精神異常者がこの病院に入院している。そして、院長を除いて医者の数は六人。それも大学から週二日だけ勤務している医者もあるから、私たち常勤が受持っている入院患者は一人につき百名にも近い。

これは情けない状態である。私たちは外来診療もすれば、ある程度の研究の時間も持たねばならぬから、入院患者の回診はごく大ざっぱになる。かりに少し念入りに一人ずつ呼びだして問診をすると、まず一日にせいぜい五名がいいところだ。受持の患者を一通り診察し終るのには一カ月かかる。言いかえると、入院患者は一カ月に一遍しか担任の医者からくわしい診察を受けられないということだ。

そんな事情で、決して精神病者でない——と私は信じた——その男、三喜田がこの病院に閉じこめられていたことも、あながち不思議ではないのだ。

三喜田は、私の患者ではない。病名は精神分裂病の妄想型パラノイド・フォームということであつた。この妄想型ほど、場合によって診断に困るものはない。なぜなら、病者はある一つの妄想を抱いているが、

買